入選（低学年の部）

ぼくもはたらくよ

鹿児島県　神村学園初等部　一年
坂口（さかぐち）　朋希（ともき）

「ともき、みんなはたらいてるんだから、あなたもはたらきなさい。」
おかあさんが、こわいかおをしておこった。ぼくは、ごろんとねころがったまま、おかあさんをみた。
「わかってるってば。」
ぼくもおこっていった。おこられると、もっとやりたくなくなるんだ。
「そうだよ。ともきもおてつだいして。みんなでしたら、あっというまだよ。」
おねえちゃんまで、おかあさんのみかた。おにいちゃんは、しらんぷり。ぼくのみかたは、だれもいない。
　なつやすみは、おかあさんがしごとにいっているあいだ、三にんでおるすばんだった。おねえちゃんとおにいちゃんは、せんたくものをほしたりたたんだり、おふろをあらったり。ちゃんとはたらいている。でも、ぼくはなんにもしない。なにをしていいかわからなかったんだ。
　おかあさんがしごとでおそくなったひ、ぼくたちはおうちのなかでたくさんあそんで、かたづけないまま、おばあちゃんのいえにいってしまった。かえってきたおかあさんのかおは、みるみるうちにつりあがった。
「もう、しらないからね。」
おかあさんは、そういって、ぷいとせなかをむけてしまった。おねえちゃんがあわててかたづけをして、よるごはんをつくりはじめた。おにいちゃんは、そとにでて、くさむしりをはじめた。でも、ぼくは、なにをしたらいいの。なにかしたいのに、わからない。おかあさんのかおは、つりあがったかおから、しょんぼりのかなしいかおになった。ないてしまうかもしれない。ぼくもぼくもはたらきたい。
「ねえ、ともきにもさせて。」
ぼくは、どきどきしながらおちゃわんあらいをするおねえちゃんにいった。おねえちゃんは、ちょっとびっくりして、それからわらった。
「いいよ。おさらわらないでね。」
おねえちゃんが、すぽんじをぼくにわたしてくれた。あわがでて、てがつるんとすべる。おとさないように、おさらをぎゅっとにぎった。だんだん、じょうずになってくるくるきゅっときれいにできた。
「ええ、ともきもおちゃわんあらってくれたの。」
おかあさんが、だいどころにきてびっくりしていった。ぼくのあたまとほっぺたをぐりぐりなでて、
「えらい、えらい。やればできるんだね。」
とほめてくれた。おかあさんのかおはにこにこで、おほしさまがきらきらしているみたいだ。
「えへへ。くすぐったい。」
ぼくは、うれしくてたまらなかった。ぼくもはたらけるってわかったんだ。もうなんだってできる。
　おかあさん、いつもぼくたちのためにはたらいてくれてありがとう。ぼく、これからたくさんはたらくよ。なんでもまかせてね。